正倉院文書と古写経

――隅寺心経の基礎的観察

宮崎健司

はじめに

正倉院文書は、主に皇后宮職写経所にはじまる官営写経所の帳簿群であり、写経所文書というべきものである。それらによって光明子発願一切経いわゆる五月一日経をはじめとする一切経や、時々の要請に応じて書写された間写経など数多くの写経事業が知られ、その分析から奈良時代仏教の教学理解や信仰のありようも読み取ることができる。また、写経所文書から知られる写経事業のなかには、遺品である古写経が伝存する場合も多く、その分析からは、写経所文書を読み解く手がかりや、写経所文書では知りえない事実も明らかにすることができる。写経所文書研究と古写経研究は、両者相俟って奈良時代仏教の実態を知る上で重要な手がかりを示してくれるといえよう。その代表的なものが五月一日経で、写経所において常写と称される主要事業として関係史料は膨大な

数にのぼる。その遺品も聖語蔵の約七五〇巻ほか約一〇〇〇巻が伝存し、両者に関する研究は大きな成果をあげている。

一方、写経所文書にはみえないものの、年紀や奥書をもつ奈良時代の古写経も多く伝存しており、それらからは写経所文書からでは知りえない写経事業をうかがうことができる。これに対して、年紀や奥書をもたない奈良時代の古写経も多く伝存しているが、これら古写経の位置づけができるのであれば、貴重な資料になるといえる。実際に年紀等のない古写経で、写経所文書にみえる写経事業の遺品と想定しうるものもある。

筆者は、かつて伝存する古写経について写経所文書にみえる写経事業との関係を指摘したことがある。一つは「年料多心経」と称される『般若心経』の書写事業であり、もう一つは光明子七七日のための『称讃浄土経』の写経事業である。それぞれ前者の遺品として隅寺心経を、後者の遺品として中将姫願経を指摘した。[1] しかし、これら研究においては、それぞれ遺品そのものの分析については十分になしえなかった。そこで、両者のうち隅寺心経について若干の観察をおこなったので、それを紹介したいと思う。

一　年料多心経と隅寺心経

まず「年料多心経」の内容についてふれておきたい。写経所文書のなかに「年料多心経」と称される『般若心経』の書写事業の関係史料が断片ながら残存している。具体的には天平十八年料・天平二十年料・天平二十一年料の三例で、そこから年料多心経の書写過程やその目的がある程度理解される。ただし天平二十年料は残紙利用の記録が残るのみなので、実際にある程度判明するのは天平十八年料・天平二十一年料の二例である。

天平十八年（七四六）料多心経は総巻数七六八巻であった。装潢の秦小広が造紙し、その支給を受けた経師の楊広足・丸部島守の二人が一紙ごとに一巻を写し、校生の粟田船守・石村熊鷹の二人が校正をおこなった。その後、一紙（巻）単位の写経は、装潢秦秋庭によって装丁されたが、三十紙（巻）を一巻に成巻した二十五巻と十八紙（巻）を成巻した一巻の総計二十六巻に仕上げられたことがわかる。そして、題師三島宗万呂が成巻後の各巻の外題を書写している。総巻数の七六八巻は、聖武天皇と光明皇后の年間の平安を祈るために、天平十八年の年間総日数分つまり三八四巻の『般若心経』を一部ずつ書写したもので、合計七六八巻が書写されたのであった。使用された料紙は黄紙であった。[2]

天平二十一年料多心経も総巻数七六八巻であった。装潢丈部曾祢万呂・治田石万呂が造紙したが、天平十八年料とは異なり、一紙ごとのバラではなく、二十紙を一巻に仕立てたものであった。料紙の支給を受けた経師達沙牛甘・志紀久比万呂・建部広足・万昆君万呂・錦部大名・大鳥祖足の六人が書写にあたり、校生粟田船守・舎人真万呂の二人が校正をおこなった。装丁の史料はみられないが、校正済みの写経三十紙（巻）を一巻に成巻した二十五巻と十八紙（巻）を成巻した一巻の総計二十六巻に仕上げられたことがわかる。なお成巻した各巻の外題を写した題師や料紙の色などに関する史料は見当たらない。総巻数の七六八巻は、天平十八年料と同様に聖武天皇と光明皇后の年間の平安を祈ったもので、天平二十一年の年間総日数と同数の『般若心経』三八四巻が一部ずつ、合計七六八巻が写された。

年料多心経の概要は、天皇と皇后の一年間の平安を祈ることを目的として、当該年の年間総日数分の『般若心経』を天皇と皇后の各一部ずつ書写させたものであった。なお、書写、装丁にあたっては、一紙に一巻ずつを写し、原則として三十紙（三十巻）を一巻に成巻し、総計二十六巻の巻子（但し一巻は十八紙）に仕立てるやり方がとられた。また、書写された『般若心経』は当時もっとも流布したと思われる玄奘訳『般若波羅蜜多心経』であった。[3]

天平十八年から天平二十一年まで年料多心経は確実に存在したと思われるので、その総巻数は三〇〇〇巻を越えるものである。これほど多数の写経の一部が今日まで伝存していても何ら不思議ではないと考え、注目したのが隅寺心経[4]であった。隅寺心経は玄奘訳『般若波羅蜜多心経』を書写した古写経群である。空海が大安寺にあった時、法華寺の東北隅の隅寺（海竜王寺）に通い、毎日一〇〇巻ずつ一〇〇〇巻を書写して堂の天井に籠め置いたと伝承され、比較的多く巷間に伝存している。ただしこの古写経は奈良時代の古写経であることは疑いがない。その体裁は、主に黄麻紙や褐麻紙を用いて多く淡墨界を施し、一紙に一巻の『般若心経』を書写したものである。ただし書写に際して行数や字詰数、首題や尾題など各巻に差異が認められる。また伝存するもののうち十部以上を貼り継ぐものがあるほか、松崎慊堂の日記『慊堂日歴』[5]文政十二年（一八二九）七月十五日条には「凡廿一通為一巻」とあり、二十紙（巻）以上を成巻したものがあった。つまり、本来は複数部数を成巻したものであった。

隅寺心経の特徴は次のように指摘できる。

①底本に玄奘訳『般若波羅蜜多心経』を使用する。

②料紙には黄麻紙や褐麻紙を用い、多く淡墨界を施す。

③一紙に一巻を書写する。

④装丁は複数部数を成巻するものがあった。

⑤奈良時代の遺品と考えられる。

これらの諸点から隅寺心経が年料多心経の遺品であると考えるが、それを傍証する遺品として個人蔵『般若心経』（10　安田文庫旧蔵、重要文化財、以下、「安田文庫旧蔵本」と称す）[6]がある。本品の奥には「天平勝宝七年析」との墨書があり、天平勝宝七年料多心経として書写されたことが想定されるのである。また、複数部数を成巻した点では、海龍王寺蔵『般若心経』（20　以下「海龍王寺本」と称す）[7]が十紙からなり、根津美術館蔵『般若心経』（09　重要美術品　以下「根津美術館本」と称す）[8]が十四紙からなることも比定の論拠といえる。

ところで、隅寺心経という呼称の隅寺は現在の海龍王寺にあたるが、奈良時代には内道場であった可能性が指摘されており[9]、内道場は「天皇の持仏堂ともういうべき存在」[10]であった。それゆえ天皇と皇后の年間の平安を祈願した年料多心経の安置場所として隅寺がもっとも適切であったと考えられる。その所縁を背景にのちに空海書写の伝承が附会し、今日の隅寺心経になったと考えられよう。

さて、年料多心経の概要とその遺品が隅寺心経であることを前稿によりながら述べてきたが、伝存する隅寺心経の示す多様な様相を考慮する時、そのすべてが年料多心経の遺品とするには少しく検討が必要になると思われる。さらに写経所文書によれば、年料多心経以外にも『般若心経』の間写例があり、天平勝宝二年（七五〇）の一〇〇〇巻心経と天平勝宝九歳の一〇〇巻心経、そして天平宝字七年（七六三）の一〇〇〇巻心経の三例が知られる[11]。この三例の写経事業からも二〇〇〇巻以上の『般若心経』の写経が生み出されているのであり、隅寺心経のなかにその遺品が含まれていても不思議ではない。そこで、隅寺心経そのものの様相を検討し、それら古写経群が一群とみてよいかどうかを検討しなければならないと考える。その前提として隅寺心経の基礎的な観察を試みることにしたい。

二　隅寺心経の基礎的観察

現在、管見の限りで確認できる隅寺心経の遺品を示したのが別掲の「隅寺心経所蔵目録（稿）」[12]である。ここでは隅寺心経の異同をみていく上で、少し煩雑ではあるが、次頁に典型的な隅寺心経である京都国立博物館蔵『般若心経』（15[13]　図1参照　以下「京都国立博物館I本」と称す）[14]を示すことにしたい。

冒頭の数字は行数を示し、首題を除いて本文からの行数を付している。また下段の数字は各行の字詰数を示している。

首題から末尾の四句偈まで十七行にわたって約二七〇字で『般若心経』が書写されている。各行の字詰めをみると、本文一行目から十四行目までは奈良時代の古写経の標準的な字詰めである十七字となっている。

一　経題

一般に仏典は首題と尾題を伴うものであるが、まず経題についてみてみたい。隅寺心経の場合、京都国立博物館I本のように、首題に「心経」とのみ記し、尾題をもたないものがもっとも多いように思われる。しかし、それ以外にも経題を具名で示す遺品もあり、さらに尾題を伴うものも存在している。

安田文庫旧蔵本では首題と尾題はいずれも具名の「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」と記している。根津美術館本は、十四紙（十四巻）を一巻に成巻するものであるが、その第一紙は首題に具名の「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」と記しているが尾題は伴っていない。唐招提寺蔵『般若心経』（24　以下「唐招提寺I本」と称す）[15]は首題に「心経」と記すのみであるが、尾題に具名の「摩訶」を欠く「佛説般若波羅蜜多心経」としている。さらに大谷大学博物

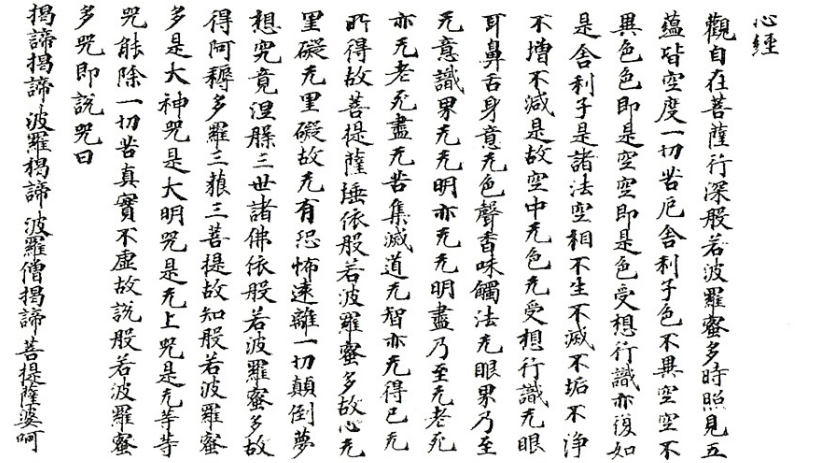

図1　京都国立博物館蔵『般若心経』（15・Ⅰ本）
出典：京都国立博物館編『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』（京都国立博物館、1964年）図版15（33）

00　心経
01　觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
02　蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
03　異色色即是空空即是色受想行識亦復如
04　是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
05　不增不減是故空中无色无受想行識无眼
06　耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
07　无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
08　亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得已无
09　所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无
10　罣礙无罣礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢
11　想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
12　得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
13　多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等
14　咒能除一切苦真實不虚故説般若波羅蜜
15　多咒即説咒曰
16　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提薩婆呵

館蔵『般若心経』（13）[16]では、尾題は伴わないが、首題に具名の「佛説」を欠く「摩訶般若波羅蜜多心経」と記している。つまり経題については次の五種類のあり方があったといえる。

①「心経」（首題のみ）
②「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」（首題のみ）
③「摩訶般若波羅蜜多心経」（首題のみ）
④「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」（首題・尾題とも）
⑤「心経」（首題）・「佛説般若波羅蜜多心経」（尾題）

二　本文の用字

用字の異同も散見される。[17] まず第一に京都国立博物館Ⅰ本では本文二行目冒頭に「蘊」字が使用されているが、静嘉堂文庫蔵『般若心経』[18]（04　以下「静嘉堂文庫Ⅰ本」と称す）では「薀」字が使用され、二種類の用字があったといえる。第二に京都国立博物館Ⅰ本では「无」字が本文五行目に三字、六行目に二字、七行目に六字、八行目に五字、九行目に一字、十行目に二字、十三行目に二字の、合計二十一字みえるが、安田文庫旧蔵本では「无」字ではなく、「無」字が使用されている。一方、静嘉堂文庫蔵『般若心経』（06　以下、「静嘉堂文庫Ⅱ本」と称す）[19]では本文七―九行目にかけて「无」字を八字使用し、それ以外の十三字は「無」字としており、「無」字と「无」字を混用する事例もみられる。つまり、ここでは三種類の用字があったといえる。第三に京都国立博物館Ⅰ本では、「已」字が本文八行目の下から二字目にみえているが、静嘉堂文庫Ⅰ本・同Ⅱ本ともに「以」字としており、ここでは二種類の用字があったといえる。第四に京都国立博物館Ⅰ本では、「咒」字が本文十三行目に三字、十四

行目に一字、十五行目に二字の、合計六字みえているが、静嘉堂文庫Ⅰ本はすべて「呪」字としており、ここにも二種類の用字があったことがわかる。

一方、文末の四句偈に目を転じてみると、やはり用字の異同がみられる。用字の異同の第五として京都国立博物館Ⅰ本では、「揭」字が第一句目に二字、第二句目と第三句目にそれぞれ一字の、合計四字みえているが、称名寺蔵『般若心経』（11　以下「称名寺本」と称す）[20]では「羯」字としており、ここでも二種類の用字があったといえる。第六に京都国立博物館Ⅰ本では、「羅」字が第二句目と第三句目にそれぞれ一字の、合計二字みえているが、称名寺本や唐招提寺蔵『般若心経』（22　以下「唐招提寺Ⅱ本」と称す）[21]では「囉」字としており、二種類の用字があったことがわかる。さらに第四句目の「菩提薩婆呵」の三字目で京都国立博物館Ⅰ本は「薩」字を使用しているが、五島美術館蔵『般若心経』（03　以下「五島美術館本」と称す）[22]では、「莎」字とし、静嘉堂文庫Ⅱ本では「沙」字を使用している。なお唐招提寺Ⅰ本では「蒖」字としており、「莎」字の誤字である可能性も考えられるが、一応、ここでは四種類の用字があったとしておきたい。

これらの用字の組み合わせを四句偈についてみると、次のような七種類のパターンがあったといえよう。

a　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提薩婆呵（京都国立博物館Ⅰ本）
b　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提莎婆呵（五島美術館本）
c　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提沙婆呵（安田文庫旧蔵本）
d　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提蒖婆呵（唐招提寺Ⅰ本）
e　揭諦揭諦　波囉揭諦　波囉僧揭諦　菩提薩婆呵（唐招提寺Ⅱ本）

f　羯諦羯諦　波囉羯諦　波囉僧羯諦　菩提莎婆呵（称名寺本）
g　羯諦羯諦　波囉羯諦　波囉僧羯諦　菩提沙婆呵（27　太山寺蔵『般若心経』）[23]

最後に用字の異同ではないが、書体が相違する場合が二例みられる。まず本文三行目に一字、七行目に一字、八行目に二字の、合計四字の「亦」字がみえているが、京都国立博物館Ⅰ本では楷書体で記されているのに対して、静嘉堂文庫Ⅱ本では、「亦」字を草書様に記している。また、本文三行目の「亦」字の下に「復」字がみえるが、京都国立博物館Ⅰ本ではやはり楷書で記すのに対して、静嘉堂文庫Ⅱ本では、偏を行書風にくずして記している。一般に仏典の書写は楷書で忠実に書写されるものであったと考えられることからすると、書体の異同を単に写経生の個性と軽々には判断できないと思われ、字体の異同としてあげておきたい。

字形等について注意してみると他にも若干の相違がみられるが、本文の用字の大きな異同をまとめると次のとおりとなる。

①「蘊」と「薀」
②「无」と「無」と「无」「無」混用
③「已」と「以」
④「咒」と「呪」
⑤「揭」と「羯」
⑥「羅」と「囉」
⑦「薩」と「莎」と「蒖」と「沙」

⑧「亦」（楷書）と「亦」（草書）

⑨「復」の偏の楷書と行書

三　功徳文と用字

本文の最末尾に功徳文をもつ遺品が知られるが、文言すべてが同じではなく、少なくとも二種類があったと思われる。

まず功徳文Aタイプとして、京都国立博物館蔵『般若心経』（14　図2参照　以下「京都国立博物館Ⅱ本」と称す[24]）には次のようにみえる。なお冒頭の数字は行数を示し、本文より連続した数字を付した。

17　誦此経破十悪五逆九十五種耶道若欲供
18　養十方諸佛報十方諸佛恩當誦觀世音般
19　若百遍千遍无問晝夜常誦此経

また、文言がほぼ同じでありながら、字句に若干の相違があるものもあり、唐招提寺Ⅰ本には、

17　誦此経破十悪五逆九十五種耶道若欲供
18　養十方諸佛報十方諸佛恩當誦此経觀自
19　在菩薩波若百遍千遍无問晝夜常誦此経

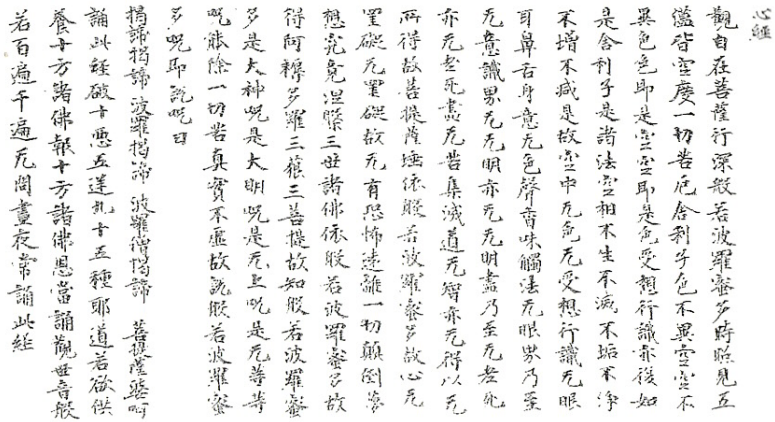

図2　京都国立博物館蔵『般若心経』（14・Ⅱ本）
出典：京都国立博物館編『古写経』（京都国立博物館、2004年）260頁　図版149

とみえており、十八行目終わりから十九行目にかけて、前者は「……觀世音般／若……」とするのに対して、後者は「……觀自／在菩薩波若……」としている。管見の限り一例のみで、このうち十九行目四・五字目を「波若」とするのは「般若」の誤りとも考えられるが、上述の事例と同様に一応区別しておきたい。そこで前者をA1、後者をA2と称しておく。

次に功徳文Bタイプとして、海龍王寺本（図3参照）には次のようにみえる。

17　誦此経破十悪五逆九十五種邪道若欲供養
18　十方諸佛報十方諸佛思當誦觀世音般若
19　百遍千遍无問晝夜常誦无願不果

功徳文は五十字足らずの文言で、A・B両タイプともほぼ同文であるが、大きくことなるのは最末尾

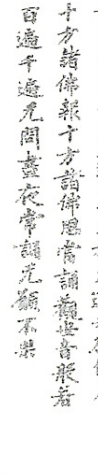

図3　海龍王寺蔵『般若心経』(20)
出典：奈良国立博物館編『奈良朝写経』（東京美術、1983年）53頁　図版82

である。Aタイプは「常誦此経」と終わるが、Bタイプは「常誦无願不果」となっている。つまり功徳文にも大別すると二種類のタイプがあったものと思われるが、詳細にわけるとするとAの二種（A1・A2）とBの三種類といえる。

上述の引用からもわかるように、この短い功徳文にも用字の異同がみられる。まず京都国立博物館Ⅱ本や唐招提寺Ⅰ本では十七行目十三字目に「耶」字を使用しているが、海龍王寺本では「邪」字としているのである。また、京都国立博物館Ⅱ本は十八行目十一字目に「恩」字を使用しているが、海龍王寺本では「思」字としている。これらの異同が功徳文のタイプの違いによるものかどうかは不明である。いずれにしても二種類の用字があったことを想定しておきたい。さらに「恩」字について、A2タイプの唐招提寺Ⅰ本では「恩」字の異体字「恩」を使用している。これについては、上述の「亦」字の書体同様に写経生の個性とみるよりも、「恩」字を使う事例として、三種類の用字

があったと想定する方がよいかもしれない。

以上、功徳文について異同をまとめると次のようになる。

①「常誦此経」（A1・A2）と「常誦无願不果」（B）
②「耶」と「邪」
③「恩」と「恩」と「思」

四　字配り

隅寺心経の用字の異同について指摘してきたが、もう一点注意する事柄がある。それは本文の文字の字配りの問題である。字配りに注目して京都国立博物館Ⅰ本をあらためてみてみると、上述のとおり本文一行目から十四行目までは十七字詰めで、奈良時代の写経の標準的な字詰めになっている。十五行目は最終十六行目の四句偈の直前で改行されたため六字詰めになり、最終行の四句偈は四字・四字・五字・五字で十八字詰めという字配りになっている。別掲の目録に示した隅寺心経二十八例のうち、半数以上がこの字詰めであり、京都国立博物館Ⅰ本が典型的な隅寺心経であったことは字配りからもわかる。しかしその字配りに異同を生じる遺品も存在している。

京都国立博物館Ⅰ本を基準に字配りの異同があるものは大きく二種類にわけられる。その一つは少なくとも本文全体の半分以上の行数にあたる九行目まで同一で、それ以降に字配りの異同がみられるものである。

このタイプでもっとも異同の少ないものが京都国立博物館蔵『般若心経』（16　以下「京都国立博物館Ⅲ本」と称す）[25]であり、次のような字配りになっている。

13　多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等咒能　18
14　除一切苦真實不虚故説般若波羅蜜多咒　17
15　即説咒曰　04
16　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提薩婆呵　18

この事例は十二行目までと十六行目には異同がなく、十三行目を十八字詰め、十四行目を十七字詰め、十五行目を四字詰めとするものである。なお本品にはA1タイプの功徳文が伴っている。

海龍王寺本も若干の異動があり、次のような字配りになっている。

12　得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多　18
13　是大神咒是大明咒是无上咒是无等等咒　17
14　能除一切苦真實不虚故説般若波羅蜜多　17
15　咒即説咒曰　05
16　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提薩婆呵　18

この事例は十一行目までと十六行目には異同がなく、十二行目を十八字詰め、十三行目と十四行目を十七字詰め、十五行目を五字詰めとするものである。

もっとも大きな異同のあるものは根津美術館本で、次のような字配りになっている。

10　罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顚倒夢想　18
11　究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得　17
12　阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多　17
13　是大神咒是大明咒是無上咒是無等等咒　17
14　能除一切苦真實不虚故説般若波羅蜜多　17
15　咒即説咒曰　05
16　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提沙婆呵　18

この事例は九行目までと十六行目には異同がなく、十行目を十八字詰め、十一行目から十四行目を十七字詰め、十五行目を五字詰めにするものである。これらを京都国立博物館I本の字配りからすると半分以上同一のものである遺品のグループとして総じてaグループと称することにしたい。

一方、本文数行で字配りの異同が生じるものもあり、例えば、知恩院蔵『般若心経』(18)(26)では、次のような字配りになっている。

05　不増不減是故空中無色無受想行識無　16
06　眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界　16
07　乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老　18

08　死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得已　17
09　無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無　18
10　罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顚倒夢　17
11　想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故　17
12　得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅　16
13　蜜多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等　18
14　呪能除一切苦真實不虛故説般若波羅蜜　17
15　多呪即説呪曰　06
16　揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提薩婆呵　18

この事例は本文四行目までと十五行目・十六行目に異同はないが、五行目と六行目を十六字詰め、七行目を十八字詰め、八行目を十七字詰め、九行目を十八字詰め、十行目と十一行目を十七字詰め、十二行目を十六字詰め、十三行目を十八字詰め、十四行目を十七字詰めにするものである。aグループとはかなり異なる字配りとなっていることから、bグループと称することにしたい。ただし、字配りの異同を詳細にみていくといくつかのパターンが考えられるが、少々煩瑣になるので、大きく二つのグループを指摘するにとどめたい。

以上、字配りの大きな異同についてまとめると次のようになる。

①字配りの異同が比較的少ない遺品（a）

②字配りの異同が激しい遺品（b）

五　その他

これまで述べてきた隅寺心経の異同は、実物調査によらずともに、図版があれば観察可能であるのだが、実物調査でしか知りえない書誌情報で重要なものがあるので、最後に一、二点指摘しておきたい。

隅寺心経をその遺品であると想定する年料多心経は、複数部数を成巻したものであったが、隅寺心経の多くは一紙のみとなっている。これは原装から剥がし取られることによって一紙となったと思われ、それが成巻されたり、軸装にされたりして今日に伝わったといえる。そうであるならば、改装に際しての化粧断ちなどにより本来の大きさから変わっている可能性が高いと考えられる。それを裏付けるように伝存する隅寺心経のうち、実物調査ないしは目録等の情報で判明する法量は、縦が二三～二八センチ、横が三七～四七センチとたいへん数値にばらつきがあるのである。特に剥がし取りの観点から、実物調査の際に注意を要するのは、本紙の左端・右端の剥がし取り痕などの観察といえよう。

もう一点は界線の状態である。一般的な写経料紙は天界と地界そして縦界が施される例が多いが、隅寺心経も淡墨の界線が引かれている。界線に注目すると、天平十八年料多心経では一紙ごとに書写され、成巻されていることから、天界や地界が継ぎ目で食い違いを生じる可能性が高い。一方、天平二十一年料多心経では、二十紙を貼り継いだ料紙に書写されており、天界と地界が継ぎ目を越えて多く連続していることが考えられる。特に海龍王寺本や根津美術館本など複数部数を成巻したものを調査する際、界線に関する書誌情報も十分に留意しなければならないと考えられよう。

おわりに

隅寺心経の多様な様相について縷々述べてきたが、これらの点は隅寺心経と写経所文書にみえる写経事業とを比較する際にきわめて重要なことであると考える。ここで見出された知見を集積することで隅寺心経をグループ分けしたいと考えているが、これはとりもなおさず、本経つまり書写に際してのテキストを究明することにもなるのである。つまり、隅寺心経としてひとくくりにされてきた古写経群を相違点によりグループわけし、それぞれの特徴に注意しながら、年料多心経をはじめとした『般若心経』の写経事業の特徴と照らし合わせ、それぞれの遺品を確定することにほかならないのである。

今後、現存する隅寺心経の所在調査と実物調査による書誌情報の集積で精度を高め、隅寺心経の全容を明らかにしたいと考える。また、これらの研究を通して、年紀・奥書等をもたない奈良時代の古写経を資料として扱うための方法論も模索できればと考える次第である。

隅寺心経所蔵目録（稿）

番号	指定	首題	尾題	紙数	功徳文	字配り	所蔵者
1		心経	－	1	－	a	山形・宝幢寺
2		心経	－	1	－	a	山形・宝幢寺
3		心経	－	1	－	a	東京・五島美術館
4		心経	－	1	A 1	a	東京・静嘉堂文庫・Ⅰ本
5		心経	－	1	B	a	東京・静嘉堂文庫・Ⅱ本
6		心経	－	1	－	a	東京・静嘉堂文庫
7		佛説摩訶般若波羅蜜多心経	－	1	－	a	東京・センリュリーミュージアム
8		心経	－	1	－	a	東京・東京国立博物館
9	重美	佛説摩訶般若波羅蜜多心経	－	14	－	a	東京・根津美術館
10	重文	佛説摩訶般若波羅蜜多心経	佛説摩訶般若波羅蜜多心経	1	－	a	東京・個人蔵（安田文庫旧蔵）
11		心経	－	1	－	a	神奈川・称名寺
12		心経	－	1	－	a	石川・石川県立美術館
13		摩訶般若波羅蜜多心経	－	1	－	a	京都・大谷大学博物館
14		心経	－	1	A 1	a	京都・京都国立博物館・Ⅱ本
15		心経	－	1	－	a	京都・京都国立博物館・Ⅰ本
16		心経	－	1	A 1	a	京都・京都国立博物館・Ⅲ本
17		心経	－	1	－	a	京都・京都国立博物館
18		心経	－	1	－	b	京都・知恩院
19		心経	－	1	－	a	京都・立命館大学
20		心経	－	10	B	a	奈良・海龍王寺
21		心経	－	1	－	a	奈良・興福院
22		心経	－	1	－	a	奈良・唐招提寺
23		心経	－	1	A 1	a	奈良・唐招提寺・Ⅱ本
24		心経	佛説般若波羅蜜多心経	1	A 2	a	奈良・唐招提寺・Ⅰ本
25		心経	－	1	－	a	和歌山・長保寺
26		心経	－	1	－	a	愛媛・太山寺
27		心経	－	1	－	a	米国・ハーバード大学美術館
28		心経	なし	1	A 1	a	米国・プリンストン大学美術館

注

（1）宮崎健司「年料多心経について」（『佛教史学研究』三十五巻二号、一九九二年、のち同『日本古代の写経と社会』、塙書房、二〇〇六年）、同「光明子七七日写経をめぐる一、二の問題」（『大谷学報』七十五巻四号、一九九六年、のち『日本古代の写経と社会』）。

（2）「間紙検定幷便用帳」（『正倉院古文書』続々修第二十八帙第七巻『大日本古文書』（編年文書）第九巻三六八頁）。

（3）玄奘訳『般若波羅蜜多心経』（唐・貞観二十三年＝六四九）、『大正新脩大蔵経』八巻八四八頁C。

（4）隅寺心経については、山本信吉「『般若心経』（十部）（隅寺心経）」解説（『大和古寺大観』五　秋篠寺・法華寺・海龍王寺・不退寺〈岩波書店、一九七八年〉一一九頁・別刷四頁）、春名好重編著『古筆大辞典』（淡交社、一九七九年）の「隅寺心経」及び「魚養心経」の項、石田茂作「般若心経の遺品」（原題「般若心経遺品解説」、岸田千代子『般若心経百巻』〈東京美術、一九七三年〉、のち同氏『仏教考古学論攷』三〈雄山閣、一九七七年〉）、飯島太千雄編著『般若心経秀華』（講談社、一九九〇年）を参照。

（5）『日本芸林叢書』一一・一二（六合館、一九二九年）所収。

（6）文部省文化庁監修『重要文化財』20書跡・典籍・古文書Ⅲ（仏典Ⅰ）（毎日新聞社、一九七五年）六〇頁、頼富本宏・赤尾栄慶編『写経の鑑賞基礎知識』（至文堂、一九九四年）一八二頁。丸括弧内の冒頭の数字は、別掲の「隈寺心経所蔵目録（稿）」の番号に対応している。以下、同じ。

（7）奈良国立博物館編『奈良朝写経』（東京美術、一九八三年）五三頁（作品82）。以下に示す海龍王寺本の書誌情報は第一紙のみのデータである。

（8）是澤恭三『写経』（根津美術館、一九八四年）。以下に示す根津美術館本の書誌情報は第一紙のみのデータである。

（9）福山敏男『奈良朝寺院の研究〈増訂版〉』（綜芸社、一九七八年）五五―八頁。

（10）薗田香融「わが国における内道場の起源」（佛教史学会編『仏教の歴史と文化』、同朋舎、一九八〇年）三七三頁。

（11）天平勝宝九歳の一〇〇巻心経および天平宝字七年の一〇〇〇巻心経については、薗田香融「南都仏教における救済の論理（序説）」（『日本宗教史研究』四〈救済とその論理〉、法藏館、一九七四年）掲載「天平年間における間写経一覧」、宮崎健司「藤原仲麻呂と『般若心経』」（『史聚』二八号、一九九三年、のち『日本古代の写経と社会』〈注1参照〉）を参照。

（12）本目録は、筆者自身の実物調査ないしは図録等で伝存が確かな遺品に限定し、不確実なものについては除外した。「目録（稿）」とした所以である。

（13）遺品に付した数字は本目録の番号に対応している。

（14）京都国立博物館編『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』（京都国立博物館、一九六四年）図版十五（三十三）、同編『京都国立博物館蔵品図版目録』書跡編日本（京都国立博物館、一九八三年）一〇八頁、同編『古写経』（京都国立博物館、二〇〇四年）九二―三、二九九―三〇〇頁。

（15）前掲注4飯島編書、八―九頁。

（16）本品に関する書誌情報は筆者の実物調査によるものである。

（17）用字の異同について、前掲注4石田論文にも言及がある。

（18）静嘉堂文庫編『仏教の美術』（静嘉堂文庫、一九九九年）七七・一一三―四頁（作品32―1）。

（19）静嘉堂文庫編『日本の書跡』（静嘉堂文庫、一九八二年）作品22、前掲注18静嘉堂文庫書、七七・一一三―四頁（作品32―3）。

（20）前掲注6頼富本・赤尾編書、一〇九頁。

（21）奈良国立博物館編『特別陳列唐招提寺の美術』（奈良国立博物館、一九九三年）四四頁。

（22）五島美術館編『久能寺経と古経楼』（五島美術館、一九九一年）九九頁。

（23）愛媛県立美術館編『空海の足音　四国へんろ展　愛媛編』（愛媛県立美術館、二〇一四年）一〇八、二一八頁。

（24）前掲注14『京都国立博物館蔵品図版目録』書跡編日本、一〇八頁、前掲注14『古写経』、二六〇、三三八頁。

（25）本品に関する書誌情報は筆者の実物調査によるものである。

（26）前掲注4岸田書、三八―九頁・図版12。